

前 言

鍼灸学術史の著作を執筆したいという気持ちは、かなり以前から持っていた。大学院生のとき、王雪苔教授の『針灸史大綱』を目にしたが、それは私に中国鍼灸学発展の壮観な輪廓を示してくれた。またほぼ同時期に、日本の考証学者である藤木俊郎氏の『鍼灸医学源流考』*¹を読んだ。これは私を震撼させ、中国鍼灸史について執筆したいという思いが、このときに芽生えた。今から思えば、当時は複雑な感情が入り混じった一種の衝動にすぎず、執筆をするための実力と条件をまったく備えていなかった。しかし十数年来この衝動はますます強くなり、この強い信念が奮い立たせてくれたおかげで、私はさまざまな誘惑に揺らぐことなく、清貧に甘んじ、研鑽に打ち込み、不断に能力を蓄積し、心中の目標に向かって一步一步着実に山を登ることができた。

1994年、大型の鍼灸古典籍の叢書『針灸古典聚珍』*²を編纂するために、現存するすべての鍼灸古典文献およびその他の関連資料を調査する必要が生じた。そこで、この良い機会を利用して、心の中で長年描いてきた鍼灸学術史について編纂し、併せて史料整理・文献研究と史学研究を有機的に組み合わせた新しい研究モデルを試みようとした。

学術史の編集形式に関しては、現在の中国史学界には主に2種類がある。第1は、時代別に人物や著作を綱〔主軸〕として、歴史事件を記述する方法である。第2は、重要な学術問題や専門テーマを綱とし、各種学説や理論の発生・変化・融合などについて歴史的考察や論述を行う方法である。もし中国国内で出版された「××史」という題名の中国医学書をこの二つのどちらかに分類すれば、ほとんどが第1のモデルに分類されるだろう。しかし、私はこの鍼灸学術史を書き始めたとき、まったく躊躇なく第2のモデルを選択した。なぜならば一つは、私は同時に年代、著作を綱とする「針灸古典聚珍書目考」*²を執筆していたため、『針灸学術史大綱』は問題を綱とする「源流を考鏡する」*³方式の書き方を採用するのは自然なことであった。こうすれば、両書は縦横に交錯して、鍼灸学術発展の立体絵巻を構築する。もう一つの理由としては、私は鍼灸学術史を研究する際は、一つのテーマごとに一步一步歩んできたため、鍼灸学術史の執筆で第2のモデルを選択するのは必然であった。しかし、この原稿がもうすぐ書き上がるというときになって、私は不十分な点を感じ始めた。なぜならば、理論上からしてもあるいは自分自身の史学研究の実践からしても、鍼灸学術の発展の法則と鍼灸文献の時代的特徴を全体的に把握することは、古代*⁴の鍼灸文献を研究するに当たって非常に重要だからである。

たとえば、隋・唐時代の鍼灸文献の一般的特徴や孫思邈の『千金要方』と『千金翼方』の関係をもし知らなければ、敦煌卷子『佚名灸方』(S.6168, S.6262。以前は「灸法図」と記していた)を解説すらできず、それを掘り下げて研究することができないのは言うまで

もない。もう一方で、同一時代でも時期が異なれば、鍼灸文献は異なる特徴を呈することがある。たとえば、明代の初期・中期・後期では、鍼灸著作の特徴は明らかに異なっている。この現象を解釈するには、明代の政治的・文化的背景について理解が必要である。このことを鑑みて、第2モデルの学術史著作の中に、第1モデルの長所を兼ね備えることはできないかと私は考えた。つまり、読者に「魚」を献上すると同時に、「熊掌」も献上しようとするものである*⁵。そこで、最初に「序論」を加えて、鍼灸学術の発展と鍼灸文献の時代的特徴と法則、および鍼灸学術史研究におけるいくつかの問題について、併せて論述することにした。このような執筆方法が成功したかどうか、「魚と熊掌とを兼ねて得る」という目的を達成できたかどうか、については読者の判定を待ちたい。

その他の単純な史学研究と異なり、鍼灸史の研究はより現実にも目を向けて、現在の鍼灸研究に信頼できる根拠を提供する必要がある。これまではさまざまな理由により、私は中国国内の鍼灸機序の研究、特に経絡の実験研究に対してはほとんど関心を持っておらず、自分自身が「第9次5カ年〔1996～2000年〕」登頂プロジェクトの予選項目である「経絡の研究」に巻き込まれるとは、昨年までは思ってもみなかった。現在は、国家「第8次5カ年〔1991～1995年〕」登頂プロジェクトである「経絡の研究」が終了し、「第9次5カ年」計画が正式に始動するときに当たる。この重要な時期に、もし鍼灸史学界が経絡学説の形成と変遷などの鍵となる問題に対して、明確な見解や重要で価値ある手掛かりを打ち出すことができないければ、鍼灸史学研究の価値はどのように体现できるだろうか。かつてアルテミシニンの研究が行き詰まったときに、薬学史の文献研究に活路を見いだした*⁶と言えるのであれば、現在重要な時期に置かれている「経絡の研究」も、まさに鍼灸史の研究を通して次の段階に進む道を探し当てなければならない。2年来、鍼灸の実験研究者との接触が多くなればなるほど、鍼灸史研究の重要性和切実性を感じる。接触してみてわかったのは、現在の最も激しい論争は、経絡研究は経絡の位置を決めることが必要なのかどうかということである。さらに接触してわかったのは、経絡の位置を決めることを強く主張する側の意見が実は統一されていないことである。どのように位置を定めるかという問題について、意見の相違は大きい。また多くの人はさらに、人体上で探し当てた組織構造は、古代経絡文献が述べる経絡の機能を必ず備えているべきであると強調している。

それでは、経絡の機能とは何だろうか。この問題についての考えはひととき一致しており、どのような見解を持つ人であっても経絡の機能に話が及ぶと、だれもが『内経』の「黄帝曰わく、経脈なる者は、能く死生を決し、百病を処し、虚実を調うるゆえんにして、通ぜざるべからず」（黄帝曰、経脈者、所以能決死生、処百病、調虚実、不可不通）（『靈樞』経脈篇）という経文を引用する。しかし、責任を持って率直に指摘すれば、『内経』のこの名言は本来は脈診の機能を指したものである*⁷。もし「経絡」の実質が血脈を指

すのだとすれば、まだこのように多くの人を動員して、三次元の構造を探し求める価値があるのだろうか。これは長年にわたって人々を困惑させ、ずっとはっきりと説明できなかった問題である（この答えは「第二部 経絡 結語」を見られたい）。

ここからわかるのは、「経絡問題」の研究を推進するに当たって、もし古代の経絡文献に対して系統的で掘り下げた研究を行い、経絡学説の形成と変遷の真実の過程をはっきりさせなければ、私たちの問題設定の根拠はこのように脆弱であるということである。そうであれば、何年論争しようと、いくつもの「5カ年」プロジェクトを登頂しようと、結局は既定の目標に向かって、おそらくは一歩たりとも前進できない。喜ばしいのは、以上の意見が実験研究者の間で共通の認識となっていることである。同時に私は、近年の報道や雑誌で発表された経絡文献研究の文章は、大多数は実験研究者が書いたものであり、実験研究者が編纂した出版済みの「経絡問題」研究の専門書の中で、古代経絡の文献研究の内容が一つの例外もなく相当な部分を占めているという現象に注目している。このような情勢に直面し、鍼灸史と鍼灸理論を専門に研究している者として、私は元気づけられると同時に、重圧をより一層感じている。

現在、鍼灸文献と史学研究を行うことの必要性については、人々（実験研究者を含む）は何の疑問も持たないだろうが、鍼灸史学をどのように研究すべきかについては、多くの人は困惑している。もし本当に鍼灸史学研究を一つの学問と見なし、自分の研究成果を長期にわたって耐えられるものにしたいのであれば、厳格で科学的な学問研究の方法が必ず必要である。これに対して、口先だけの空談をしたり、流行のラベルを貼って虚勢を張ったりしても何の役にも立たない。重要なのはこつこつと実際の作業を行い、併せて自分の研究作業と結び付けて、成功の模範を示すことである。これもまた、非常に忙しいこの1年で、私がこの極めて困難な作品を編纂した重要な要因でもある。

近年、中国医学の史学文献研究では大きな地滑り現象が起きているが、鍼灸史学研究は、もともと始まってからあまり年数がたっておらず基礎が弱いため、さらに厳しい試練に直面している。これに対して、古参の鍼灸学家はひどく心配し、新世代の研究者の多くは他人や周囲の状況のせいにしてしている。思い起こせば、中国鍼灸界はここ何年かは、鍼灸史学の研究で重大な進展がなかっただけでなく、鍼灸史料の整理においてもすべてが思いどおりであったわけではなく、今に至ってもきちんとした大型の鍼灸古典籍の叢書がない。中国の学者が鍼灸の古代文献を研究する際は、多くは〔中華人民共和国の〕建国初期に出版された活字本に依拠している。しかし、私の暫定的な調査では、鍼灸史学研究の多くの間違いがこれによって生じていて¹⁾、中国の活字本の古医籍は、日本の研究者の信頼を失ってしまった。

1) 黄龍祥：建国以来古医籍整理若干問題的初步考察、『古籍整理出版情況簡報』，1996年第9期。

中国の鍼灸史学研究の現状にはさまざまな不足があるとはいえ、現在の私たちには、やはりこれまでとは比べものにならない優位性とチャンスがあると思う。

第1に、最も重要なのは、現在の中国医学界にはいまだかつてない穏やかな学術環境がある点である。もし学術領域のあらゆる所に立ち入り禁止区域や「地雷埋設地域」があるとするれば、「真理を追究する」という史学研究の原則は単なる口先だけの追求になってしまう。このほか、現代鍼灸学が発展するにつれ、鍼灸文献と鍼灸史学の研究に対して、さらに高度な内容が求められており、従来の単純な史料整理方式ではその要求を満足させるには遠く及ばない。そのため人々は、深いレベルの鍼灸史学・文献の研究を展開するために各種の準備を始めている。

第2に、史学研究は史料から離れることはできないが、近年は多くの史料や医籍が新たに発見され、文物考古作業には新たな進展があり、史学情報も極めて豊富になり、さらに深いレベルで歴史を認識するために便宜を提供している。これまで論争が止むことのなかった学術問題についても、これによって解決された。たとえば、明代の鍼灸の名著『鍼灸大成』巻9・治症総要篇には「楊氏」という2字が注記されていて、この篇は楊氏の鍼灸臨床の実録であり、楊ようけいしゅう継洲の鍼灸学術を考察するための代表文献であると、これまでずっと考えられていた。実は、この篇の文は明以前の鍼処方書である『鍼灸集成』からそのまま書き写したものである。この書が新たに発見されなかったら、証拠が乏しく解決が難しかったこの案件は、判断の下しようがなかったであろう。当然このような「張の帽子を李にかぶせる」というちぐはぐな現象は、『鍼灸大成』の中ではこの例だけでなく、またこのような間違いは『鍼灸大成』だけに見られるものではない。そして、このような間違いを訂正するのは、主に新たな史料の発見に依存している。またたとえば、馬王堆帛書の経脈文献や張家山漢簡の『脈書』などが出土したことによって、経絡学説の形成と歴史的変遷を考察するための信頼できる資料がもたらされた。これらの地上と地下の史料の新発見は、まるで濃霧が幾重にも立ち込めた医学史界に幾すじかの陽光が射し込んだかのようである。

第3に、中国国内の鍼灸古典籍の整理においては、特に目立った進展はないが、隣国の日本では10～20年来、中国医学^{*8}の古典籍、特に鍼灸古典籍に対して大規模で系統的な整理研究が行われた。たとえば、1978年に出版科学総合研究所は『鍼灸医学典籍大系』全23巻を出版した。オリエント出版社はさらに全世界で鍼灸古典籍を探し求め、ここ二十数年で、すでに前後して14期の鍼灸古典籍叢書『臨床鍼灸古典全書』（日本・中国・朝鮮の鍼灸古典籍およそ200種を含む）を整理出版し、計画に従って継続出版の予定である。この出版社はこれ以外に、6セットの『東洋医学善本叢書』、合計20余種を出版している。これらのほとんどは、中国ですでに亡佚した重要な医籍または版本である。また重要な中国医学の古典籍に対して、日本の研究者は全面的な基礎研究作業を行った。最近では、中

日の研究者は協力して、日本で大切に保存されている中国で散佚した古医籍を、すべて複製して中国に戻して整理・研究することを計画している。

第4に、十数年来、私は中国中医研究院〔現在の名称は中国中医科学院〕図書館や北京の大型図書館が所蔵するあらゆる鍼灸古典籍および明代以前のその他の中国医学古典籍のほとんどすべてを通読し、それを基礎としてさらに引き続きその他の省や市の図書館が収蔵する鍼灸古典籍を調査した。それ以外に、中国国内や日本の友人の心のこもった援助の下で、日本で公開出版された、あるいは公開出版されていない鍼灸古典籍およびその他の非常に貴重な重要資料を入手した。これらはどれも、私がその後に鍼灸史学研究を行う上でのしっかりとした基盤を築いてくれた。

しかし漏らすことなく史料を手に入れることは、鍼灸史学研究における最初の一步にすぎない。錯綜した史料の中から手掛かりを見つけ、法則を探し出すには、非常に長い道を歩む必要がある。遠回りを少しでもしないために、ここ数年私は古人と今人および自分の史学研究中の経験と失敗を絶えず総括してきた。そして、その中の普遍性のある問題を「序論」の中で専門テーマの形式で論述することで、史学研究方法の重要性、および真理を追究する過程の困難さについて、人々が感覚的に認識できるようにした。

『針灸学術史大綱』は新たな研究モデルを用いて作り上げた最初の試作品である。この最初の新製品を高いレベルのものにするには、製品そのものの品質以外に、製作方法においても独自性がなければならない。引用文の信頼性や視覚性を高め、他の人や前人の誤りを再び犯さないために、古代文献を引用するに当たっては、引用文の出典を詳細に注記する以外に、引用頻度が高い重要な引用文については、できる限り原書原版の書影をそのまま挿入し、引用文の量が多くかつ頻度が高い文献（たとえば「第二部 経絡 第三篇 経絡専篇の研究」など）については、引用する原版の全文を付け加えた。版本の選択においては、最も早期で、最も善い版本を採用する以外に、中国国内の研究者が目にするのが難しい版本を付録した。これは、他の人や後の人がさらなる研究を行うのに便宜をはかるためである。

この『学術史大綱』を構想し執筆する過程で、どのように「学術」と「思想」の境界線を引くかという学術界での議論がしばしば伝わってきた。昼夜の別なく執筆に取り組んでいた私には、この議論についてより多く、より深く関心を払う時間がなかったが、私が思うに、学術と思想は截然と分けがたく、思想を抜き出した後のいわゆる「学術」にはいったい何が残るだろうか。従って私は、学術を強調するために思想性を弱めるようなことはしたくない。科学思想史の研究により、古代に築かれた科学仮説の基本原則は簡単であり、できるだけ簡単な原理を用いてかなり複雑な現象を説明することに努めたことがわかっていく。私の作業は、現代人が極端に複雑化してしまった古代医学思想をさらに神秘

化しようというのではなく、古代医学思想が持っていた単純性を再現しようとするものである。

人には感情があるが、科学には感情がなく、人の主観的な意志では変えられない。学問研究の過程で、公正で客観的な態度をどのようにして終始保持するかについて、私はずっと探求してきた。自分の研究成果を書面形式で表現することは、やはり不十分な点があり、読者と直接交流することが難しく、情報の伝達が一方向であり、面と向かった接触が欠けている。この不足を補うために、本書は特に学术界で争論が多く注目されるテーマについて、私は「作者」を演じる以外に、可能な限りさまざまなレベルの学者や読者の立場に立って、彼らになり代わってそれぞれの問題を提起し、本書の作者に説明を求めた。これにより、異なる立場に立って考え、異なる観点を弁護するという思考法を試みた。こうすることで、一方では作者と読者の距離を縮めることができ、もう一方では自分の研究をより厳格にし、科学性を強め、真理に近づけることもできる。これによって、自分の仕事が長い時間の試練に耐えることができ、またさまざまなレベルのさまざまな学術的観点を持つ人々に受け入れられやすくなる。

もし時間が許せば、コンピューターの利点を十分に利用して、視覚的に優れ情報量の多い図や表をデザインし、そのような形式を通して、口頭による交流の効果を部分的に実現できるようにしたい。併せて適切な時期に、本書の一部テーマまたは全文をインターネット上に載せて、広大なインターネット上の読者と平等に直接交流するという目的を本当に実現したいと考えている。

増修補記：

北京の華夏出版社より出版された2001年版に比べ、今回の版は次のような増補、修訂を行った。

- ①「第一部 序論」に、史学研究の理論に関して専門に検討した「困惑・思索・開拓」篇を追加した。
- ②2001年版の「序論 第七篇 鍼灸基礎理論の現代研究と史学研究の接続」を修正、調整して「現代の経絡研究に関する若干の考察」とし、「第二部 経絡」の第四篇の後に置いた。
- ③「第二部 経絡」の結語と書全体の後記を書き改めた。

黄龍祥 1999年1月脱稿、2000年1月 修訂、2001年10月 増修

連絡先 : 中国中医研究院〔現在の名称は中国中医科学院〕針灸研究所

郵便番号 : 100700

E-Mail アドレス : hymhlx@163.com